Osaka University Knowledge Archive

Title	薫の人物造型 : 身から放つ芳香の機能
Author(s)	白, 雨田
Citation	詞林. 2006, 39, p. 39-57
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67548
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

薫の人物造型
――身から放つ芳香の機能――

白雨田

はじめに

匂宮巻に登場する薫は、身から芳しい香を放っている。この芳香は薫の名前の由来でもあり、薫の人物造型における重要な特徴でもある。一方、薫の芳香は物語の中で十分な展開がなされてなかったことが、従来問題として指摘されてきた。[1] 近年、三角洋一氏の論考により、薫の芳香の典拠について新たな見解が提示されている。[2]

薫の人物造型には大枠として釈尊伝の釈尊があり、より具体的に肉付けとして、父がだれであるか疑いをもたれ、出家をめぐる言説もある釈尊の子羅睺羅の故事と、羅睺羅も活躍する『維摩経』の香飯の寓話が利用された、ということを予想しておきたい。

三角氏は香飯の香の意味について、境野黄洋氏『大蔵経講座　維摩経・勝鬘経講義』[3]の「此の香は、戒を言って居るものであらう」という解釈を引用し、香飯の香は、大乗菩薩の戒定慧の戒であることを指摘した。これは極めて興味深い示唆である。ただし、同論文では戒と香との関係や薫の芳香との関わりなどについてはふれられていない。

本稿は、香は戒であるとの指摘を踏まえて、薫の芳香の働きに着目しつつ、香と戒との関係から薫の芳香を解読していくものである。

まず、匂宮巻における薫の描写に焦点をあて、仏弟子である舎利弗との類似性を検討しながら、論を進めていく。

一、舎利弗との関わり

匂宮巻で、母女三の宮の仏道修行を見た薫は、次のような思いを抱いている。

宮もかく盛りの御かたちをやつし給て、何ばかりの御道心にてか、にはかにおもむき給けん、かく思わずなりける事の乱れに、かならずうしとおぼしなるふしありけん、人もまさに漏り出で知らじやは、猶つゝむべき事の聞こえにより、われにはけしきを知らする人のなきなめり、と思ふ。A明くれ勤め給やうなめれど、はかもなくおほ

どき給へる女の御悟りのほどに、蓮の露も明らかに、玉と磨き給はんこともかたし、B五つのなにがしも猶うしろめたきを、われ、此み心ちを、おなじうは後の世をだに、と思ふ。（匂宮巻二一七）

母女三の宮の「道心」を疑い、極楽浄土の往生は難しいだろうと薫は思う。傍線A・Bに注目してみよう。「女の御悟り」であるから、「五つのなにがし」があるがゆえに往生が難しいというのは、薫の本音であろう。即ち、女三の宮の「道心」はともかくとして、そもそも「女」だから往生は難しいだろうと思っているのである。

「五つのなにがし」とは「五障」のことで、その出典は『法華経』提婆達多品第十二[4]であることはすでに諸注に指摘されている。ではその関連部分を見てみよう。

その時、舎利弗は、竜女に語りて言わく「汝は、久しからずして、無上道を得たりと謂えるも、この事は信じ難し。所以はいかん。a女身は垢穢にして、これ法器に非ず。云何んぞ能く無上菩提を得ん。仏道は懸曠にして、無量劫を経て、勤労して行を積み、具さに諸度を修して、然して後、乃ち成ずるなり。b又、女人の身には、猶、五つの障あり。一には梵天王と作ることを得ず、二には帝釈、三には魔王、四には転輪聖王、五には仏身なり。云何んぞ、女身、速かに成仏することを得ん。文殊菩薩の説法を聞いて成仏できた龍女のことを舎利弗は疑っている。傍線aには、「女身」は「何んぞ能く無上菩提を得ん」、即ち悟りを得ることが出来ない、またbには、女人には「五障」があるから、成仏はできないと舎利弗は思ったとある。前の傍線A・Bと対照してみると、文脈が一致している。女人往生、女人成仏の問題で薫は舎利弗と同じ観点を持っていることが分かるようになる。このことについて、小林正明氏は[5]、

「権実」の天台教判でいうなら、……舎利弗は「小乗権教」、……竜女成仏をふまえた「提婆達多品」後半の総括は「実大乗教」の立場といえる。……ちなみに、……龍女成仏を反証する…「実大乗教」ではなく、論破される「小乗権教」の視点によって、母の勤行をながめる薫がここにいる。

と論述している。

舎利弗の女人不成仏論は『法華経』だけではなく、ほかの大乗仏典にも見られる。例えば、『維摩経』観衆生品[6]には、次のような一節がある。維摩居士の室に現れた天女に説法され、不思議に思った舎利弗との間に次のような問答が交わされている。

舎利弗言はく、汝何を以てか女身を転ぜざる。天曰く、我れ十二年より来、女人の相を求むるに、了に不可得なり、当に何の転ずる所かあるべき。譬へば幻師の幻女を化作するが如し。若し人ありて、何を以てか女身を転ぜ

ざると問はば、是の人正問と為んや不や。舎利弗言はく、不なり、幻に定相なし、正に何の転ずる所かあるべき。天曰く、一切の諸法も亦復是くの如し、定相あることなし、云何ぞ乃ち女身を転ぜざると問ふや。

舎利弗はなぜ天女が女の身を脱しないのかと問う。この質問を、僧肇は『注維摩詰経』[7]で、「汝、無礙の智をもって有礙の身を受く。しかるに転捨せざるはなんぞや」と注釈している。「礙」とは「障」のことで、即ち「五障」のことである。[8]天女のすばらしい智恵と、五障がある女身とはあまりにもふさわしくないと舎利弗は思っていた。その後、天女が神通力でもって舎利弗を女の姿に変身させ、波線部の「あらゆる存在に定まった形はない」という道理を舎利弗に悟らせる。

このように、女人成仏否定論を唱えた舎利弗は『維摩経』では論破され、否定される役を演じている。

また『仏説転女身経』[9]にも、似かよった場面が見られる。生まれて無垢光女と名付けられた女児が、釈尊の門下に参じて舎利弗を論破する一節である。

爾の時、尊者舎利弗は、復た無垢光女に問いて言はく。汝、浄住世界無垢称王仏の所従り、此の女身を受く、此の間に来たる也り。無垢光女答て言はく、尊者舎利弗よ、彼の佛世界で女人有ること無し。舎利弗言く、汝は今何故に、此の女形を以て此の間に生まれ来たり。女は即ち答て言はく。我は今男形・女形、亦た色・受・想・行・識を以て此の間に生まれ来たるとなさざる。……爾の時、無垢光女は、前に佛足を礼す、而して是の言を作す。一切の諸の法は男無し、女無し。此の言は若し実ならば、令して我が女身を男子と化して成る。此の言を発す時、三千大千世界は六種に震動し、無垢光女は女形が即ち滅して、変化して相好、荘厳の男子の身を成就す。

神通力とすばらしい智恵の持ち主である無垢光女が女身であることを不思議に思い、舎利弗はなぜ女身でこの世界に生まれたのかと質問する。無垢光女は「一切諸法無男無女」という道理を述べ、直ちに男子に変わって、菩薩となっていた。

以上のように、『法華経』、『維摩経』、『転女身経』において舎利弗はまるで女人不成仏論の代表のように批判され続けていることは明らかであろう。またこれらの経典は平安時代にすでによく知られていた経典でもある。

『法華経』と『維摩経』は言うまでもないが、『転女身経』は『菅家文草』[10]の願文によくその名が見られる。「為藤大夫先妣周忌追福願文」(元慶八年四月十八日)、「為清和女御源氏外祖母多治氏七丶日追福願文」(仁和二年七月十三日)、「為諸公主奉為中宮修功徳願文」(寛平四年十二月二十一日)などである。また紫式部と同時代の選子内親王の家集『発心和歌集』の第十六番歌にもその名が見られる。平安時代の女性の逆修や死後の追善の経供養のときには、法華経以下の経に必ずといってよいほど、この転女身経が入っていることが指摘

されている。[11]

当時よく知られていた大乗仏典で舎利弗が論破されるという役割を与えられていたことは、作者もよく知っていたと考えられるであろう。にもかかわらず、匂宮巻で女人成仏できない旨の台詞を薫に言わせているのは、舎利弗と同様に薫を批判すべき対象として設定しているのであろう。

舎利弗と薫との関わりについて、もう一つ見逃がしてはならない事がある。前述した『維摩経』観衆生品での一節を見てみよう。文殊菩薩が世尊の使いとして維摩居士を見舞った。二人の間で議論が交わされている時、室内に一人の天女が現れ、菩薩や大弟子の上へ華を散じたのである。菩薩たちの上に降りかかった華はみなすぐ下へ落ちるが、舎利弗ら大弟子に降りかかった華は身体に密着して離れない。

一切の弟子の神力も華を去れども去らしむること能はず。爾の時天、舎利弗に問ふ、何が故に華を去る。答へて曰く、此の華不如法なり、是れを以て之を去る。天曰く、此の華を謂つて不如法と為すこと勿れ。所以は何んとなれば、是の華は分別する所なし、仁者自ら分別の想を生ずるのみ。若し仏法に於て出家して、分別する所あらば不如法と為す、若し分別する所なくんば、是れ即ち如法なり。諸の菩薩を観るに、華の著かざることは、已に一切分別の想を断ずるが故なり。[12]

傍線部で、仏弟子たちはどうしても華を取り除くことができず、これを見た天女が、なぜ華を払いのけるのかと尋ねると、舎利弗は、この華は法にかなわないから取り去るのだと答えている。この部分について、僧肇は、[13]

香華、身に著すは沙門の法にあらず。ここをもってこれを去る。

と注釈している。鎌田茂雄氏も、

小乗仏教では香華を衣服や体につけることは戒律に反するとされています。体を飾ることは異性を誘惑することになるからです。小乗仏教徒である舎利弗が体についた花びらを取り去ろうとしたのは当然であった。……多くの菩薩たちに花びらをまいても、花びらが体につかないのは、一切の分別の想念を断っているからです。大乗仏教徒である菩薩には一切の想念はありません。花びらをつけていると戒律に反するというような恐れやおびえもありません。[14]

と、より詳しく解釈している。

舎利弗は女人不成仏論を唱えているというだけではなく、小乗仏教の戒律にこだわることでも非難の対象となっている。

舎利弗の香華を嫌がる描写は、薫の次のような特徴を想起させる。

うち忍び立ち寄らむものの隈も、しるきほのめきの隠れあるまじきに、うるさがりて、をさをさ取りもつけ給はねど、　（匂宮巻二一九）

人目を忍んで女のもとに通おうとしても芳香が邪魔になり、すぐ人に分かってしまうので、薫は自身の芳香を気にし、嫌がっている。一般貴族のように服に香を焚くことはめったにしていなかった。

薫の身に持つ芳香は舎利弗の身に付く花びらのように、いやでも取れない厄介な存在になっている。

舎利弗の香華との関係は、舎利弗が香華が身に付くことで、女性を誘惑して戒律を破ることになってしまうのを恐れて嫌がっていたのに対し、薫はその逆で女のもとに近付こうとしてもすぐ人に分かってしまい、近付くことができないので芳香を厄介に思っている。一見正反対の役割を果たしている香華と芳香なのだが、薫の仏道や女性に対する態度から考えると、

中将は、世中を深くあぢきなき物に思すましたる心なれば、中〳〵心とゞめて、行はなれがたき思や残らむなど思ふに、わづらわしき思ひあらむあたりにかゝづらはんはつゝましく、など思すて給。　（匂宮巻二二〇）

とあるように、仏道に専念したい、女性から遠ざかりたいと切望している点で舎利弗との接点があったのではなかろうか。

では、薫の芳香について、物語にはどのように描かれているのか、そしてどんな役割を果たしているのか。まず薫の芳香の特徴から見てみよう。

二、「戒香」としての香

二―一、薫の芳香の特徴

薫の芳香の特徴について匂宮巻には、次のように描写されている。

A香のかうばしさぞ、此世の匂ひならず、あやしきまで、うちふるまひ給へるあたり、遠く隔たるほどのをい風に、まことに百歩の外もかほりぬべき心ちしける。たれも、さばかりになりぬる御有さまの、いとやつればみたゞありなるやはあるべき、さま〴〵に、我、人にまさらんとつくろひ用意すべかめるを、かくかたはなるまで、Bうち忍び立ち寄らむものの隈も、しるきほのめきの隠れ有まじきにうるさがりて、をさ〳〵取りもつけ給はねど、あまたの御唐櫃に埋もれたる香の香どもも、此君のはいふよしもなき匂ひを加へ、C御前の花の木も、はかなく袖ふれ給ふ梅の香は、春雨の雫にも濡れ、身にしむる人多く、秋の野に主なき藤袴も、もとのかほりは隠れて、なつかしきをひ風ことに、おりなしからなむまさりける。

（匂宮巻二一八）

この芳香の特徴は、柳井滋氏により三つに分類されていた。[15] 簡単にまとめてみると、（以下特徴A・B・Cとしておく）。特徴Aは、遠くまで匂う芳香の強さである。特徴Bは、芳香に

より薫の所在は隠れようもなく、人にさとられてしまう。特徴Cはほかの草木の香と混じり合うことによって微妙な芳香となることである、とされている。ここで特に特徴Bに注目したい。薫は自身の芳香を「うるさがりて、をさ〳〵取りもつけたまはねど」と思っている。芳香が薫の好色行為を邪魔するため、薫は芳香を厄介なものだと思っている。

前節で見た舎利弗の香華から想起されるのは特徴Bであろう。

心の中には、身を思しる方ありて、物あはれになどもありければ、心にまかせてはやりかなるすき事をさ〳〵好まず、よろづの事もてしづめつゝ、おのづからおよすげたる心ざまを、人にも知られ給へり。（匂宮巻三二一）

出生の秘密に悩まされ仏道を志向している薫は、浮いた色事を好まなかった。

仏教では女犯は禁物である。薫は幼い頃からすでに仏道修行を志している。仏教の戒律は守らなければならないものであろう。『岩波仏教辞典』（第二版）には、「戒とは修行規則を守ろうとする自律的な決心で、修行を推進する自発的な精神である。在家信者は、仏教を修行しょうと決心するとき、仏・法・僧の三宝に帰依し、比丘に従って五戒を受ける…このように仏教の修行者は、在家も出家もすべて戒に基づいて修行する。」とされている。「五戒」とは「在俗信者の保つべき五つの戒（習慣）。不殺生・不偸盗・不邪淫・不妄語・不飲酒戒からなる」という、仏教で守るべき基本的な戒律とされている。薫が女のもとに忍び寄る行為は「不邪淫戒」にふれるであろう。

薫の香が彼の好色行為を邪魔するのは、「不邪淫戒」を破ること、即ち「破戒」を阻止しようとすることであろう。

薫の香がいかなる香であるかについては、東屋巻に至って女房たちにより語られている。本文中で唯一、香の具体的な名称が現れた箇所でもある。

「経などを読みて、功徳のすぐれたる事あめるにも、香のかうばしきをやんごとなきことに、仏の給をきけるもことはりなりや。薬王品などにとりわきてのたまへる五づ千だんとかや、おどろ〳〵しきものの名なれど、まづかの殿の近くふるまひ給へば、仏はまことし給けりとこそおぼゆれ。幼くおはしけるより、行ひもいみじくし給ければよ。」など言ふもあり。また、「先の世こそゆかしき御有さまなれ」など、口〴〵めづる事どもを、すゞろに笑みて聞きゐたり。（東屋巻一五一）

これは、中の君のもとを訪れた薫が帰った後も、彼の寄りかかった「真木柱」や「茵」からは芳しい移り香が漂っていたことに対する、中の君付きの女房たちの会話である。傍線を付したように、薫の香は、薬王品に特筆されている牛頭栴檀を思わせるものであったことが分かる。

女房たちは、薫がその身から芳香を発している由来を、幼

時からの勤行による功徳であると解釈している。ここの「薬王品」とは、『法華経』の「薬王菩薩本事品第二十三」を指した言葉である。薬王本事品では、功徳により身から芳香を発することが、次のように叙述されている。[16]

若し人有りて、この薬王菩薩本事品を聞き、能く随喜して善しと讃めば、この人、現世に口の中より常に青蓮華香を出し、身の毛孔の中より常に牛頭栴檀之香を出さん。得る所の功徳は上に説ける所の如し。

とある。即ち、薫の芳香は薬王品を随喜して得られた功徳「牛頭栴檀」の香であるとされている。

では、前述した薫の芳香の特徴、特に特徴Bの彼の好色行為を邪魔する点と、「牛頭栴檀」とはどんな繋がりがあるのか。作者の発想はどこから得られたのか。以下、香の働きに着目し、仏教経典に見られる「戒香」という「香」と比べながら見ていきたい。

二―二、戒香の特徴

「戒香」について、仏教では、二種類の「戒香」が見られる。一つは『雑阿含経』[17]などで「根茎華の香はよく風に逆らいて薫ずるに非ず、唯だ善士女の持戒清浄の香有るのみ、逆順にも諸方に満ちて普く聞知せざるなし」とされる「持戒の香」である。即ち、『織田佛教大辞典』で「戒徳の四方に薫ずるを香に譬ふ。」と解釈されているように、「持戒の徳」を香に喩える架空の香である。もう一つは天台密教の『行法肝葉抄』で「戒塗香とは、塗香を以て戒波羅蜜と為す。」[18]とされているように、「塗香」を指している。「塗香」とは、『大智度論』[19]に「塗香は二種有り、一は栴檀香なり、摩して以て身に塗る。二には種種の雑香なり、擣きて以て末つと為し、以て其の身に塗り、及び衣服を熏じ、并びに地壁に塗る」と述べられているように、実際に存在している香である。

では、仏典で描かれた「戒香」の特徴について、まず、譬えとしての「戒香」から見てみよう。

この種の「戒香」は、仏典に多数見られる。その特徴は以下のようにまとめることができる。

まず、『法句経』の第十二華香品には、[20]

奇草芳花は、風に逆はずして薫じ、道に近きて敷開く、徳人は香に逼る。旃檀、多香、青蓮、芳花、是れ真なりと曰ふと雖も、戒の香には如かず。華の香氣は微なり、真なりと謂ふべからず、持戒の香は、天に到るも殊勝なり。

と戒香は普通の植物の香より遙かに優れていることが示されている。

さらに詳しく言及されているのは、次の『出曜経』である。『出曜経』の（戒品七）[21]には、次のようにある。

爾の時、世尊、此の法の本處に因みて、大衆に在って、此の頌を説かく、「華香は風に逆はず。芙蓉、栴檀香の

ごとし。徳香は風に逆つて薫る。徳は人遍く聞香す。」と。夫れ世間の諸の華香は尽く順風に香り、逆風に香らず。**戒徳の香**は亦逆風に香り、順風に香る。世間の華香は斉しく欲界薫り、色界に薫らず。或は直ちに一方に薫り、三方に薫らず。**持戒の香**は十方に香、徹す。華香は逼近すれば乃ち別たんや。持戒の香は上に徹して、一ら天に究竟す。是の故に説いて曰く、「華香は風に逆はず、徳は人遍く聞香す。」と。

持戒の功徳としての香は、風に逆らっても香り、あらゆる場所に、色界にまでも届くなど、香の強さが強調されている。

また、『優婆塞戒経』（受戒品第十四）[22]には、もう一つの特徴が見られる。

善男子よ、若し是の如き優婆塞戒を受けて、能く至心に持ちて毀犯せしめざれば、則ち能く是の如き戒果を獲得す。善男子よ、優婆塞戒を名づけて瓔珞と為し名づけて荘厳と為す。其の香は微妙にして無辺界に薫じ。不善法を遮する善法律たり。即ち是れ無上の妙寶蔵なり。

傍線部で示したように、持戒の功徳としての香は、匂うだけではなく、この匂いで不善を善にし、善を守る性質をも持っている。『法句経』や『出曜経』に見られる特徴が持戒の功徳としての香であるなら、この特徴は、持戒による実際の効果であると言えるだろう。これは「戒」の目的でもある。『織田佛教大辞典』には、「戒」とは「身心の過を防禁すること」と解釈されている。「戒香」が「戒」としての役割を果たすとすれば、人の修行を推進するため、人を戒める効果もあるのである。

以上の戒香の特徴をまとめると、一、普通の草木花より遙かに優れている。二、風に逆らっても薫り、色界にまで届く強さのこと。三、戒める性質を持つこと。これら三つの特徴がある。

ここで、「戒香」の特徴と、前述した薫の香の特徴とを対比させて確認してみよう。

まず、薫の香の特徴Aは、百歩の外にも届けるとされているのであるから、香の強さを強調した「戒香」の特徴二と同様であると考えられる。次に、薫の香の特徴Bは、薫の好色行為を邪魔しているのであるから、「戒香」の特徴三の戒める効用と合致している。そして、植物の香より強いという特徴Cは、「戒香」の特徴一、普通の草木花より遙かに強いという特徴と一致している。このようにそれぞれの三つの特徴を対比して見ると、薫の香と「戒香」とはほぼ同質であることが明らかになる。

これらの香の三つの特徴は、さらに大きく二つに分類できる。すなわち、外的表現としての香と、内的な働きをもたらす香とに分類ができる。外的な表現としての香とは、「この世の匂いならず」といわれるほど、遠くまで届く性質及び普通の植物の香より遙かに強いという特性により、広く知られ

ることを意味する。つまり、『出曜経』にある「徳は人遍く聞香す」という特徴である。一方、内的な働きをもたらす香とは、戒香の特徴Bのように、『優婆塞戒経』に示されるような「不善法を遮する善法律たり」のことである。匂いの範疇を超えて、不善な行為を遮り、人の行為を戒めるという特徴である。

ここで、実際に存在している「戒香」である「塗香」を見てみよう。

先ず、『大智度論』に言及された「塗香」の「栴檀香」について、『倭名類聚抄』（草木部・木類）には「栴檀。唐韻に云く、栴檀は香木なり。内典に云く、赤きは之を牛頭栴檀と謂う。…」と解釈されている。すなわち牛頭栴檀は栴檀香の一種であることが明らかになる。

「塗香」である牛頭栴檀は「戒香」でもある。東屋巻で、薬王品を随喜する功徳として、得られた薫の牛頭栴檀の香は、同時に「戒香」という役割もあることが分かるようになる。

以上、薫の芳香の特徴と「戒香」の特徴と比較した。その結果、薫の芳香の特徴と「戒香」の特徴とは一致していることが分かるようになる。特徴だけではなく、薫の芳香が物語の中でどのように機能しているのかも問題となっている。

次ぐに、「戒香」の「徳は人遍く聞香す」と「不善法を遮する善法律たり」という二つの特徴を視点として、薫の香が「戒香」としては如何に物語に展開したのかを検討することとする。

三、戒香の展開

三―一、徳は人遍く聞香す

まず、「戒香」の特徴「徳は人遍く聞香す」という視点から薫の芳香の機能を捉えてみよう。薫の芳香の描写は、物語中に多数見られる。その用例を整理すると、薫の芳香は、周りに絶えず認識されていたことが分かる。以下、用例を順に見て行く。

（A）薫の不思議な芳香が一番気になり、ライバル意識を燃やしているのは匂宮である。

かく〔薫が〕いとあやしきまで人咎むる香にしみ給へるを、兵部卿の宮なん、他事よりもいどましくおぼして、……　（匂宮巻二一九）

（B）紅梅大納言は、薫の芳香が前世のすぐれた果報であるとの認識を示す。

〔匂宮の〕移り香は、げにこそ心ことなれ。晴れまじらひし給はん女などは、さはえしめぬかな。源中納言は、かうざまに好ましうはたき匂はさで、人柄こそ世になけれ。あやしう先の世の契りいかなりける報いにかと、ゆかしきことにこそあれ。おなじ花の名なれど、梅は生ひ出でけむ根こそ哀なれ。此宮などのめで給ふ、さること

ぞかしなど、花によそへてもまづかけきこえ給ふ。
（紅梅巻二四二）

（C）玉鬘の女房たちは、薫の芳香が俗世間のものではないと、薫を褒め称えている。

〔若女房〕「この殿の姫君〔＝大君〕の御かたはらには、これ〔＝薫〕をこそさし並べて見め」と聞きにくく言ふ。げにいと若うなまめかしきさまして、うちふるまひ給へる匂香など、世の常ならず。姫君と聞こゆれど、心おはせむ人は、げに人よりはまさるなめり、と見知り給らむかしとぞおぼゆる。
（竹河巻二五八）

（D）薫の芳香はこの世のものではなく、まるで浄土の芳香のように、不思議なほど芳しく匂っていると宇治の姫君の女房は思う。

げにやつしたまへると見ゆる狩衣姿の、いと濡れしめりたるほど、うたてこの世のほかの匂ひにやと、あやしきまでかほり満ちたり。
（橋姫巻三一八）

（E）また、宿直人と周りの人たちも薫の言いようもなくよい匂いを確認した。

宿直人が、御脱ぎ捨ての艶にいみじき狩の御衣ども、えならぬ白き綾の御衣の、なよ〳〵といひ知らず匂へるをうつし着て、身にはた、え変へぬものなれば、似つかはしからぬ袖の香を、人ごとにとがめられめでらるゝなむ、なか〳〵所せかりける。
（橋姫巻三二四）

（F）帝まで薫の芳香は人よりすぐれていると思う。

〔帝〕「中納言の朝臣こなたへ」と仰せ事ありてまいり給へり。げにかくとりわきて召し出づるもかひありて、とをくよりかほれるにほひよりはじめ、人に異なるさまし給へり。
（宿木巻三一）

（G）東屋巻では、中の君の女房たちと浮舟の母君も薫の芳香を称賛し、持経の功徳である牛頭栴檀として受け止めた。

寄りゐ給へりつる真木柱も褥も、なごり匂へる移り香、言へばいとことさらめきたるまでありがたし。時々見たてまつる人だに、たびごとにめできこゆ。

「経などを読みて、功徳のすぐれたる事あめるにも、香のかうばしきをやんごとなきことに、仏の給をきけるもことはりなりや。薬王品などにとりわきてのたまへる五づ千だんとかや、おどろ〳〵しき物の名なれど、まづかの殿の近くふるまひ給へば、仏はまことし給けりとこそおぼゆれ。幼くおはしけるより、行ひもいみじくし給ければよ。」など言ふもあり。また、「先の世こそゆかしき御有さまなれ」など、口〴〵めづる事どもを、すゞろに笑みて聞きゐたり。
（東屋巻一五一）

薫の香の性質について、紅梅大納言が、「かうざまに好ましうはたき匂はさで、人柄こそ世になけれ。あやしう先の世の契りいかなりける報いにかと、ゆかしきことにこそあれ」と評しているように、薫の香は、一般貴族たちが風流のため

に身につけた薫物などではなかった。草子地にある「この世の匂ひならず」（匂宮巻二一八）と示されているように、以下A・B・C・D・E・F・Gの傍線部もこの意味の延長で、薫の香は「この世」の匂いなどではなく、絶えず物語中では世間の一般の香と区別され続けている。Gになると、薫の香を嗅いだ人々が連想したのは、傍線部で示した通り、仏の教えのこととなるのである。

これらの例から分かるように、「この世の匂ひ」ではない薫の香は、物語中に繰り返し確認され、今上帝から宿直人まで、薫と関係するあらゆる人に賞讃されているのである。このように、薫の香はまさしく「戒香」の「徳は人遍く聞香す」として機能していたのである。

三―二、不善法を遮する善法律たり

次に、「戒香」のもう一つの特徴、「不善法を遮する善法律たり」の視点から、薫の香の機能を考えてみたい。不善な行為を遮り、人の行為を戒めるというのが、「不善法を遮する善法律たり」である。仏道修行に励む薫にとって、一番不善な行為は、仏道を外れて恋をすることであろう。

女性に対しては、まじめそうな薫であるが、それは、

さしあたりて、心にしむべきことのなきほど、さかしだつにや有けむ。（匂宮巻二一一）

と草子地に暗示されているように、ただ単に気にいる人がいないせいである。しかし、宇治十帖に入ると、その姫君たちが遂に現れるのである。

仏道修行と相反する恋に対して、「戒香」はいかに戒めるという働きを果たしたのであろうか。薫と宇治の姫君たちとの恋の交渉場面から見て行くことにする。

大君の場合

橋姫巻では、薫は阿闍梨から八の宮の噂を聞き、その人柄と俗聖の生活ぶりに惹かれ、宇治に通うようになる。その三年目の秋、薫に恋が芽生える。

山がつのおどろくもうるさしとて、随身のをともせさせ給はず。柴のまがきを分けつゝ、そこはかとなき水の流れどもを踏みしだく駒のあしをとも、猶、忍びてとようひし給へるに、隠れなき御匂ひぞ風に従ひて、主知らぬ香とおどろく寝覚めの家々ありける。（橋姫巻三一二）

薫はなんとかしてその身を隠そうとしたが、香が強烈に匂ったため、眠っている山里の人々を目覚めさせた。宇治へのこの道を、薫はすでに三年通っていたが、この日の夜だけは薫の香のことが強調されているのである。

八の宮の山荘についた薫は、琴の音にひかれ、姫君の様子を垣間見る。その行動は秘密だったにもかかわらず、

かく見えやしぬらんとはおぼしも寄らで、うちとけたりつる事どもを、聞きやしたまひつらむと、いといみじくはづかし。あやしく、かうばしく匂ふ風の吹つるを、思

ひかけぬほどなれば、おどろかざりける心をそさよ、と心もまどひてはぢをはさうず。（橋姫巻三一六）

と強く匂う香により、ついに姫君にまで気付かれてしまう。

この垣間見は、以後の薫の道心を大きく揺さぶることとなる。

思ひしよりはこよなくまさりて、おかしかりつる御けはひども面影に添ひて、猶思ひ離れがたき世なりけり、と心よはく思知らる。（橋姫巻三一三）

薫はついに、大君に恋心を持つようになる。しかし、大君は薫のその気持ちに取り合わない。八の宮の一周忌が近くなった頃、薫は宇治を訪れた。その夜、薫は大君と対面し、口説いた上、屏風をおしあげて、大君の側に添い伏した。ところが、その時、

名香のいとかうばしく匂ひて、樒のいとはなやかにかほれるけはひも、人よりはけに仏をも思きこえ給へる御心にてわづらはしく、墨染めのいまさらに、をりふし心いられしたるやうにあはゝしく、思ひそめしにたがうべければ、かゝる忌なからむ程に、この御心にも、さりともすこしたはみ給ひなむなど、せめてのどかに思なし給。（総角巻三九一）

と不思議なことに、傍線部のように、その時、仏前の名香や樒などの香が「いと」香ばしく匂ってきたのである。さきに、第二節で、薫の香の特徴をまとめたが、その一つに外の草木花の香より遙かに強く、他の香とまじり合うことによって、新たな匂いが加わったり、もとの匂いが隠れたりするというものがある。これほど強烈な薫の香であったが、ここではその強い香については少しも言及されず、逆に、その名香や樒が「いと」匂ってきたとある。ここでも、「戒香」の見事な働きを見ることができる。

つまり、仏道修行の功徳として発生した薫の香は、「戒香」として彼を戒めつつ、彼の「不善」（好色行為）を防ぎ、「善」（持戒）の行為に導くよう機能しているのである。この場面では、薫の好色行為を阻止するため、わざと隠れて、名香や樒の匂いだけを残らせたのであろう。或いは、薫の香は仏前に供える名香や樒と、もともと同じ性質を持つがゆえに、その匂いを強める役割が働いたのかもしれない。故に、名香や樒の匂いは「いと香ばしく」や「いとはなやかに薫れる」と、一層濃厚になったのではないだろうか。

香が匂った結果として、薫は「せめてのどかに思ひなしたまふ」（総角一三）になり、徐々に大君への情熱を抑えることができたのである。薫の「持戒」が危うくなった時、香はその場で、「戒香」として有効に機能したことが分かる。

翌日、大君が中の君のところに行くと、

御衣ひき着せたてまつり給ふに、御移り香の紛るべくもあらずくゆりかゝる心ちすれば、宿直人がもてあつかひけむ思あはせられて、まことなるべしといとおしくて、

寝ぬるやうにてものもの給はず。　（総角巻三九六）

と中の君にまで薫と会ったことが分かるほどであった。

大君は薫を拒み続けているうち、ついに病死してしまう。薫の恋は成就されなかったのである。

大君が亡くなった後は、

そのままに、また精進にて、いとゞたゞをこなひをのみし給ひつゝ、明かし暮らし給。　（宿木巻四七）

とあるように、薫はひたすら仏道に精進したのだった。

中の君の場合

大君の死後も、薫は大君のことを忘れることができなかった。しかしその一方で、匂宮に中の君を譲ったことへの後悔を募らせていた。中の君への思いが次第に強くなっていく。後に、匂宮は六の君のもとにも通うようになる。中の君の不安と悲しみを慰めようと、薫は度々二条院を訪れる。

さて、又の日の夕つ方ぞ、渡り給へる。人知れず思ふ心しそひたれば、あいなく心づかひいたくせられて、なよゝかなる御衣どもを、いとゞ匂はしそへ給へるは、あまりおどろおどろしきまであるに、丁子染めの扇のもてならし給へる移り香などさへたとへん方なくめでたし。　（宿木巻六二）

この日の薫はいつもとは違い、傍線部のように、衣に香を焚くことをしているのである。物語中で初めて見られる、薫が薫物を焚く場面である。すでに、匂宮巻に描かれているように、薫は香を厄介な物として、「うるさがりて、をさをさ取りもつけ給はねど」（匂宮一七〇）と、めったに薫物をつけることはなかった。大君のもとへ訪れる時でさえしていなかったこの香を焚くという行為をなぜ行ったのであろうか。おそらく薫は以前の失敗を気にして、あえて意識的に「戒香」と対抗しているからなのではなかろうか。薫は人工的な薫物を使い、自身の「戒香」を隠して、より効果的に中の君を口説くつもりではないのだろうか。

香を焚きしめて、中の君のもとを訪れた薫はやがて、思いを抑えかねて中の君の袖を捉え、御簾の中に入り添い臥したが、中の君が懐妊のしるしとして身につけていた腹帯に気付き、仕方なく、中の君のもとから退出した。この危険な行為は、密かでなければならないが、大君の時と同様、「戒香」によって匂宮の知るところとなった。

その日、匂宮は久しぶりに二条院に戻ってきた。

宮（＝匂宮）は、いとゞ限りなくあわれと思ほしたるに、かの人の御移り香のいと深くしみ給へるが、世の常の香の香に入れたきしめたるにも似ず、しるき匂ひなるを、その道の人にしおはすれば、あやしと咎め出で給て、いかなりしことぞとけしきとり給に、ことのほかにもて離れぬ事にしあれば、言はん方なくわりなくて、いと苦しとおぼしたるを、さればよ、かならずさることはありなん、よもたゞには思はじと思ひわたる事ぞかし、と御心

さはぎけり。さるは、単衣の御衣なども脱ぎかへ給てけれど、あやしく心よりほかにぞ身にしみにける。

（宿木巻七一）

中の君は宿直人や大君に薫の移り香が染み込んでいたことから、予め薫の香の強さを知っており、傍線部のように、服を全部替え、匂宮に発見されないよう十分な準備をした。にもかかわらず、匂宮は中の君の体から薫の香を嗅ぎつけたのだった。薫の香は不思議と、いつの間にか中の君の身体に染みついていたのだった。前述したように、薫は二条院を訪れる前に、たっぷりと薫物を衣に焚き、人工の香を使って自分の体から放つ香を隠そうとしていた。しかし、中の君の身体に残ったのは、人工の香ではなく、匂宮がすぐに薫であることを嗅ぎ分けたように、薫の独特な香であった。この香を嗅ぎつけた匂宮はもちろんであるが、中の君も一層薫との接触を避けるようになり、薫の中の君に対する恋も実らなかった。大君に次いで、中の君への恋も実らずに終わってしまったのである。ここにみられる「戒香」の役割は大きかったと言えよう。

大君を忘れることができない薫は、阿闍梨の勧告により、宇治に寺院を建て始める。一方中の君も薫の自分に対する思いをさまさせるため、異母妹浮舟のことを薫に打ち明ける。

浮舟の場合

薫は浮舟と宇治で邂逅した。長谷寺での参詣が終わり、宇治に泊まりにきた浮舟を薫は垣間見るのである。

やう〳〵腰いたきまで立ちすくみ給へど、人のけはひせじとて、猶動かで見給に、若き人、「あなかうばしや。いみじき香の香こそすれ。尼君のたき給にやあらむ」。老い人、「まことにあなめでたの物の香や。京人は猶、いとこそみやびかにいまめかしけれ。天下にいみじきこととおぼしたりしかど、東にてかゝる薫物の香は、え合はせ出で給はざりきかし。

（宿木巻一一二）

薫の香は気付かれた。しかし、浮舟の侍女たちはその香が薫の香であるとは知らないので、これを弁の尼が焚いた薫物だと誤解した。しかし、

人の咎めつるかほりを、〔薫が〕近くのぞき給なめりと〔弁は〕心得てければ、うちとけごとも語らはずなりぬるなるべし。

（宿木巻一一四）

と弁の尼にははっきり分かってしまったのだ。ここでも、薫の垣間見は、香により人に知られてしまうのであった。しかし、浮舟の場合は最初から誤解の連続であった。

東屋巻で、中の君のところにきていた浮舟は、偶然、匂宮に見つかってしまう。

さるもののつらに、顔を外ざまにもて隠して、いといたう忍び給へれば、このたゞならずほのめかし給ふらん大将にや、かうばしきけはひなども思わたさるゝにいとはづかしくせん方なし。

（東屋巻二五五）

と浮舟は香りだけで、薫であると誤解した。幸い乳母が現れ、ようやく匂宮が立ち去り、この場は収まる。

この匂宮との邂逅は、浮舟の運命を変えた。後に、匂宮は浮舟が宇治にいるのを知り、薫を装い、浮舟との逢瀬を実現させた。その二回目の宇治行きは、次のように描かれている。

右近は、いかになりはて給べき御ありさまにかと、かつは苦しけれど、こよひはつゝましさも忘れぬべし、言ひ返さむ方もなければ、おなじやうにむつましくおぼいたる若き人の、心ざまもあふなからぬを語らひて、「いみじくわりなきこと。おなじ心にもて隠したまへ」と言ひてけり。もろともに入れたてまつる。道のほどに濡れたまへる香のところせう匂ふも、もてわづらひぬべけれど、かの人の御けはひに似せてなむ、もてまぎらはしける。

（浮舟巻二二一）

香の道に、特に薫の香に詳しい匂宮は、薫の香に似せた香をつけ、浮舟のまわりをごまかしたのだった。

浮舟の場合、薫の香は、浮舟のまわりに弁の尼と誤解されたり、逆に浮舟が匂宮の香を薫と誤解したりと最初から誤解の連続となっている。その誤解は最後まで続き、浮舟の周りを欺き、匂宮は浮舟との逢瀬を実現させたのである。恋を阻害するという役割から言うと、香は依然として「戒香」として働いている。しかし、香の主体である薫は初めから無視され、香というものだけが強調されてきた。さらに、香の能動性が最大限に発揮されるよう、最後には、香は薫から完全に離れ、匂宮というほかの主体を借りて、浮舟と薫の恋を破壊したのである。

逢瀬の結果、浮舟は匂宮に心を傾けるようになった。後に浮舟は失踪し、この失踪により、薫と浮舟との恋は破局を迎えたのである。

以上、薫と三人の姫君との恋を辿り見てきた。その結果、薫は女君を垣間見る時、例外なく香によって周りに発見されてしまうこと、また女に近寄るたびに、薫の香が「戒香」として作用していること、さらに、同じ手法ではなく、「戒香」は三つの異なる手法で薫の恋を邪魔し、阻害していることが分かった。薫の香は「戒香」として、戒める力を十分に発揮したのである。

おわりに

薫の香は一般貴族たちが風流のために焚く香と違い、彼を女性に近寄らせず、仏教の戒律を守らせる「戒香」として物語中で機能している。そのため、薫の恋は次々と破局してしまう。その結果として、薫は持戒し続けることとなる。つまり「戒香」によって、薫は「持戒」せざるを得なくなっていると言えよう。

大君、中の君、浮舟との恋が次々と失敗に終わった薫は、次のように思うのである。

かゝることの筋につけて、いみじくものすべき宿世なりけり、さま異に心ざしたりし身の、思のほかにかく例の人にてながらふるを、仏などのにくしと見給にや、人の心を起こさせむとて、仏のし給方便は、慈悲をも隠して、かやうにこそはあなれ、と思つゞけ給つゝ、をこなひをのみし給。（蜻蛉巻二七五）

女の問題での失敗の連続は自分の定められた宿世である。これは仏の方便であり、仏道に戻るように自分を導いているのだ、と薫は悟るようになる。そして自ら「をこなひのみし給」と、ひたすら仏道に励むようになった。

また、薫は最後の夢浮橋巻に至り、横川の僧都に自分の心境を次のように述べている。

公私にのがれがたきことにつけてこそさも侍らめ、さらでは、仏の制し給ふ方のことを、わづかにも聞きをよばむは、いかであやまたじとつゝしみて、心のうちは聖に劣り侍らぬものを、ましていとはかなきことにつけてしも、をもき罪得べきことは、などてか思ひたまへむ、さらにあるまじきことに侍り。（夢浮橋巻三九八）

傍線部に注目してみよう。「仏の制し給ふ方のこと」とは、即ち仏法で禁じられている戒律を指す。薫は自ら戒律を守っていることを述べているのである。薫の「持戒」はせざるを得ない「消極的な持戒」から「積極的な持戒」に変化していることがうかがえる。

以上、「戒香」の特徴を確認しながら、薫の香が戒香として物語中で展開していることについて検討した。薫の香は遍く周りの人々に認識、賞讃され、そして、それがために「戒香」として、戒めの力も発揮している。「戒香」としての香の展開方法は同一手法ではなく、多様なパターンを駆使し、ついに自ら戒律を守り、積極的に修行を行う人物へと薫をいざなったのである。

本稿では薫と舎利弗との類似性から、薫の人物造型の方法を検討した。舎利弗は「智恵第一」と言われるが、大乗仏教においては、この智恵が小乗仏教徒の智恵でしかないと貶んでいるため、『法華経』や『転女身経』、『維摩経』など大乗仏典では、舎利弗が非難すべき対象となっている。作者は舎利弗の故事をよく理解していたにもかかわらず、敢えて薫を舎利弗になぞらえた。また仏教にある「戒香」という譬喩手法を駆使し、薫の香を物語で有効に機能させた。

『維摩経』では、天女の説法で舎利弗が大乗の空を悟るに至ったが、物語中では、作者が芳香を使って、薫に戒律を守らせ、修行に専念できるようにさせている。薫には小乗仏教徒の悟りしかないという設定は、薫の物語の重要な出発点であると考えられる。その出発点があるからこそ、仏道修行の必然性が生まれてくる。

また、女への幻想を捨てて、修行に専念することこそが薫の歩む道であると作者は考えていたであろう。但し、「龍女

成仏」という文脈は「女人救済」に関連するが、薫が女人成仏否定論者（＝小乗仏教の立場）である限り、他者を救済することのできない人物として造型されているのではないかということも付言しておきたい。

注

(1)最初に本居宣長は『玉の小櫛』で、

香のかうばしさぞ云々此事いとうたがはし、其故は、大かた人の身に、おのづからかうばしき香は、なき物なるに、かくいへるは、作りごとめきたり、此物語は、さるあやしき、つくり事めきたることはかゝず、みな世にあるさまの事なるに、此事のあやしきは、いかなることにか、

と疑問を出している。

また柳井滋の「物語世界と超現実―薫の体香のことなど」（『国文学』昭和五二年一月号）では、

香の由来を神秘的に想像させたばかりに、香の描写が行き過ぎたと思われる点もあるし、また薫るの体香が仏典の世界のものであるならば、いかにもそれらしい特色を考え出してもよかったのであるが、そうでもない。……侍女たちが幼時よりの勤行の功徳と想像する、その想像にふさわしいように体香が理想化されているとは必ずしもいえないようである。また芳香の神秘の薫の内面への浸透も十分であるとは認め得ない。

とあり、福嶋昭治「匂宮と薫中将」（『講座源氏物語の世界』第七集　昭和五七年）では、

「ただ世の常の人様」であるべき薫が「いとこの世の人とは造り出でざりける」様子であるのは不思議としなければならない。あるいは作者自身がこの設定が負担になり、香については後の巻々では発展させることなく、等閑りの扱いをしたのかも知れない。

とある。さらに、井野葉子「研究の現在と展望―宇治の風景」（『研究講座源氏物語の視野　五〈薫から浮舟〉』平成九年）では、

幾多の構想の変化の結果、不発弾に終った構想の残骸の断片の数々が、そのまま物語に残され放り出されているからだ。薫の体香、三条の宮の焼失、……残された断片は断片のまま不協和音として自己主張し続ける。

とあり、薫の体香は作者の不発に終わった構造の残骸とされている。

柳井論以降、管見の限り、大きな反論は見られない。一方、仏教の論理を用いず、香を物語の展開方法の一種として論じられた三田村雅子氏の「方法としての〈香〉―移り香の宇治十帖へ―」（『源氏物語　感覚の論理』有精堂、一九九六年）もあり、本稿が多くの示唆を得ている。

(2)三角洋一「匂宮巻の薫の人物設定と『維摩経』」（『むらさき』第四十輯・二〇〇四年）で、薫の芳香について、

『維摩経』香積品によれば、芳香を放つ者には二つタイプあって、一つは娑婆世界を見学しに維摩の方丈にやってくる衆香世界の九百万の菩薩で、……もう一つが、維摩の方丈に居合わせて香飯を食した娑婆世界の者たちのタイプで、……

前者は薫を聖徳太子になぞらえたことや『法華経』薬王品の「牛頭栴檀」を持ち出して薫を褒めそやしていることと同軌

であり、『維摩経』香積仏品・菩薩行品の香飯もまた典拠であると見る妨げにはならない。後者についても、出生についての疑惑をかかえ、出離の思いを抱いて、正妻をもつまいと身構えている薫に整合していて、なかなか消滅しないということでふさわしいと思う。芳香の二つタイプが薫の外形と内面に振り分けられていると理解すればよかろう。

と論じられている。

(3)境野黄洋『維摩経・勝鬘経講義』(大蔵経講座第八巻、東方書院、一九三二年)

(4)『大正新脩大蔵経』第九巻、三十五頁下

(5)小林正明「女人往生論と宇治十帖」(『国語と国文学』一九八七年八月)

(6)『大正新脩大蔵経』第一四巻、五四七頁下

(7)『大正新脩大蔵経』第三八巻、三八七頁上

(8)『大智度論』(巻第二)、『法華文句』(巻第八下)などでは五礙となっている。

(9)『大正新脩大蔵経』第一四巻、九一八頁上

『大正新脩大蔵経』にある『仏説転女身経』の言い方以外、『菅家文草』に『転女成仏経』、『転女身経』などの名が見られる、『発心和歌集』に『転女成仏経』となっている。

(10)日本古典文学大系『菅家文草』(岩波書店、一九六六年)

(11)西口順子「山・里・女人」(『女の力—古代の女性と仏教—』、平凡社、一九八七年)

(12)『大正新脩大蔵経』第一四巻、五四八頁中

(13)『大正新脩大蔵経』第三八巻、三八七頁上

『維摩経』の天女が降りかかった「華」について、僧肇はただの花ではなく、いい香りを放つ「香華」と解釈している。

(14)鎌田茂雄『維摩経講話』(講談社学術文庫・一九九〇年)

(15)同注(1)「物語世界と超現実」—薫の体香のことなど」(『国文学』一九七七年一月)で、香の特徴を三つに分けて論じられた。

「百歩のほか」とは、遠くまでかおることの形容であり、百歩香という香もある。これは薫の体香の特色の第一である。……ここでは、香の微妙に優れていることを強調せず、もっぱら、遠くまで匂う香の強さがいわれている。第二の点は、第一の点をうけついで、「隠れあるまじき」ということである。薫の所在は、その香によってすぐに人にさとられてしまう、ということは強さの上に、薫の体香は、独特の香りをもっていた、ということである。……第三の点は、……他の香と交じり合うことによって微妙な芳香となることである。

(16)『大正新脩大蔵経』第九巻、五四頁下

(17)『大正新脩大蔵経』第二巻、二七八下

非根茎華香　能逆風而熏　唯有善士女　持戒清浄香
逆順満諸方　無不普聞知　多迦羅栴檀　優鉢羅末利
如是比諸香　戒香最為上　栴檀等諸香　所熏少分限
唯有戒徳香　流熏上昇天……

「戒香」の用例は、『仏説戒徳香経』、『増一阿含経』など阿含部経典をはじめ、多くの経典に見られる。

(18)『大正新脩大蔵経』第四巻、五六三頁中では、

戒塗香者。以塗香為戒波羅蜜。塗香者。天竺法極熱時沈檀等香和水塗身。能除熱悩。五戒乃致三昧耶戒香除煩悩罪業熱悩。令得法身清涼楽。亦復如是。故塗香為戒。

とある。この経典の引用は有賀要延氏『香と仏教』に教わった。

(19)『大正新脩大蔵経』七八巻、八七九頁中
(20)足立俊雄『大蔵経講座法句経講義・四十二章経講義』(東方書院・一九三二年)
(21)『大正新脩大蔵経』第四巻、六五七頁下
(22)『大正新脩大蔵経』第二十四巻、一〇四七頁上

※『源氏物語』本文の引用は新日本古典文学大系『源氏物語』に拠った。仏教経典の読み下し文は『国訳一切経』、岩波文庫本『法華経』にそれぞれ拠った。『仏説転女身経』は稿者が私に訓んだ。〔 〕内は私に補った箇所、……は省略した箇所である。

(はく・うでん　本学大学院博士後期課程)